



上矢作小学校だより

【学校の教育目標】たくましく すこやかな 上矢作の子

大 船 山

第 5 号

令和5年5月31日

ホームページアドレス <http://www.ena-gif.ed.jp/kamiyahagi-e/>



「待つ」ことが日常の中でどれだけありますか？

校長 細江 幸次

校長室には毎月いくつかの会報誌・教育冊子が届けられます。今月号のその中のひとつにこんなことが書かれていました。

「……テクノロジーが大きく進歩した今、日常から「待つ」ことがどんどん消えています。私たちはそれを「便利になった」と歓迎します。しかし、本当にそうなのでしょうか。「待つ」という行為にひそむ大切な価値を失ってしまっていないでしょうか。(中略)かつて「待つ」ことはありふれたことだった。1時間に1台しか来ない列車を待つ、数日後のラブレターの返事を待つ、果物の熟成を待つ(中略)。待ちこがれつつ時間潰しをすること、期待しながら不安を抱くこと、そんな背反する思いが「文化」という形へと熟成させた。(中略)しかし現代社会は「待たなくてよい社会、待つことのできない社会になった」のです。」(「倫風」2023年6月号『待つ』ことを考え、実践する 上廣哲司)より抜粋)

現在、各学年とも総合的な学習の時間や生活科・理科の学習活動では栽培活動が盛んに行われています。毎日、登校後に自分たちの畑に行き水やりをしている低学年の姿を見かけますがそれ以外の多くは植え放しで、成長の変化をつぶさに観察に来ることもなく、いわゆる「放置状態」となっているようです。植物だからそんなに大きな変化はないと思っているのか、毎日の成長の様子に興味をもつ子はどちらかというと少数なのでしょう。



高学年 田植え

でも、アサガオ等は1日あたり10cm以上もツルを伸ばすし、絶えず太陽の向きに花の向きを変えるものや花を開閉させるものも少なくありません。ですから学校の田畑で育つ植物にも何らかの変化があるはずなのですが、インターネット等を使って、効率的にそういう事実を知り、あたかも実体験をした気になっていることがどうも多いように感じています。

もう少し話題を広げて、自分自身のことについて「待つ」ことを考えてみましょう。自分自身が「こうなりたい」と考え、そのために「〇〇を続けてやってみよう」と決めたとします。それをどれだけ愚直に続けられるかで、その人の成長の違いが出てくると思っています。特に小学生のような伸び盛りの子どもたちは続けてやっていたらそれなりの成果があるはずですが、たった数回の試みで効果がないと結論を出してはいないだろうか、つまり成果が表れるまで「待つ」ことができているのだろうかと考えてしまいます。冒頭に紹介した文のように現代社会に生きる私たちは、大人も子どももどんどん「待つ」ことが苦手になってきているのではないかと思います。小学生の内は短いスパンで目標を立て、振り返ってその成果を実感すること、そしてそのスパンをどんどん長くしていきながら、社会に出たときに5年、10年の取組の成果を待つことができるようになったらいいなと思っています。

～努力の成果なんて目には見えない。でも、紙一重も重なれば本の厚さになる。(君原健二)～